

女性の美を導くスター、ミス・シセイドウ

山崎 まどか

「良家の子女求む」

一九三三年、大手新聞に掲載されたその募集記事を見て、資生堂の新しい宣伝活動スタッフである、ミス・シセイドウに応募してきたのはどんな女性たちだったのだろうかと考える。

その頃、資生堂の本社がある銀座には、新しい職業に携わるモダン・ガールたちが颯爽と街を歩いていたはずだ。タイピストやバスの車掌、電話交換手、そしてデパートのマネキン・ガール。

最新ファッションに身を包んで、デパートのショウウィンドウや陳列台に立って自分たちが身につけている商品や催し物の紹介をするマネキンは当時、とても華やかでモダンな職業として世間の注目を浴びていた。マネキンの中から、駒井玲子のようなスターも生まれている。

一九三〇年に発表された岡田三郎の短編小説「マネキンの誘惑」は、女学校時代の友達がマネキン・ガールになったことを知った若い女性が、保守的な家庭を抜け出てその職業を目指すという物語だった。

この新しい職業にチャレンジしようとした「良家の子女」たちは、「マネキンの誘惑」の主人公のように気概のある若い女性だったに違いない。元祖マネキン・ガールだった駒井玲子は、会社初のキャンペーン・ガールとなるミス・シセイドウの採用と育成のために資生堂に囑託社員としてスカウトされている。しかし、ミス・シセイドウを育てる時、

駒井は面接や筆記テスト、朗読等を経て選ばれた九名の女性たちに「あなたたちはマネキン・ガールとは違う。プライドを持ちなさい」と言うて聞かせたそう。

実際、ミス・シセイドウの研修内容を聞くと、ただのキャンペーン・ガールというよりも、資生堂の看板を背負うのにふさわしい一流の女性を育てようとしていたことがよく分かる。彼女たちはただ、化粧のテクニックについて学んでいたのではない。メーカーやスキンケアの技術の土台となる美顔術や生理学、皮膚科学などの他に、接客マナーやセールス・トーク、身だしなみや礼儀作法を学び、更に感性に磨きをかけるために美術鑑賞や観劇などを通して芸術に触れたという。支給された制服と鞆は一流店であつらえたオーダー・メイドのもの。ミス・シセイドウとして活躍するのの際して、宝塚の芸名のように、ミス・チアキ、ミス・サカエといった「ミス」を冠したそれぞれの名前も決められた。

そんな風に大事に育てられ、お揃いの制服を着て宣伝活動のために全国をまわったミス・シセイドウは化粧品会社の生んだ独自の「スター」だった。星（スター）は夜空で輝き、人々の道しるべとなって正しい行き先へと導くものだ。しかし、ミス・シセイドウたちは遠い空ではなく、実際にアドバイスを求める女性たちのもとへと降りて

Origin of Beauty



ミス・シセイドウ研修 声楽の時間 1934年



第7期生 採用試験風景 1935年

MISS SHISEIDO



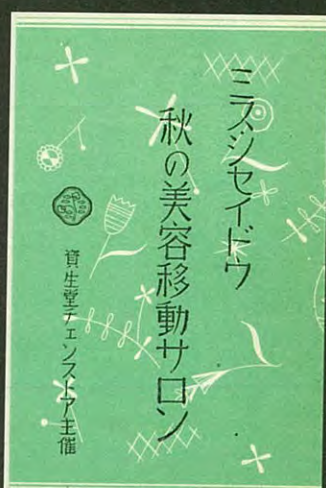
オーダーメイドのコートを着た1期生 (左からサカエ・ルミ・チアキ・リラ・マユミ・サナエ・ミハル) 1934年



『資生堂グラフ』第14号 中表紙 1934年



『資生堂グラフ』第8号 中表紙 1934年



「ミス・シセイドウ秋の美容移動サロン」ご案内

Origin of Beauty of

MISS SHISEIDO

資生堂制定 美容体操

資生堂が戦後にはじめて「美容体操」を発表したのは、美容体操の歴史が長いこと、また戦後の女性に健康な体を築いてほしいという思いから、一九五二年「レディ」雑誌の「美容体操」を制定しました。この体操は、女性の健康と美意識の向上を目的として、科学的な方法に基づいて考案されました。

この「美容体操」の完成には東京女子体育大学の講師先生方にご指導いただきました。指導にあたり、ご指導いただいた先生方には、この体操の完成に多大なご貢献をいただきました。

この体操は、女性の健康と美意識の向上を目的として、科学的な方法に基づいて考案されました。

この体操は、女性の健康と美意識の向上を目的として、科学的な方法に基づいて考案されました。

「資生堂制定 美容体操」1958年



(A) 第五幕 劇団近代美容生 彼女の魔術

「資生堂近代美容劇」第五幕 “彼女の魔術” 1934年



第一幕 劇団近代美容生 お肌は常に若し

「資生堂近代美容劇」第一幕 “お肌は常に若し” 1934年

きた。

彼女たちは「近代美容劇」というちょっと不思議な寸劇をホールやデパートで演じた。郊外の文化住宅に住む姉妹に扮したミス・シセイドウたちが、化粧問答を通して新しい化粧品や化粧法などを教える劇だったという。集まった女性客たちは劇を通して、日常の各シチュエーションに合った化粧法について学んだ。その劇が終わると、ミス・シセイドウたちは制服に着替えて、女性客たちの相談に応じ、処方箋を書いたという。女性が、女性の客のために化粧品をくわしく解説することも、その頃はまだ珍しかった。

美しいが、近寄りたくない存在ではない。親身になって、女性たちが自分の美を探すのを手伝ってくれたミス・シセイドウはどのように見られていたのだろうか。女優や歌手のような芸能人とは少し違った形で、女性たちの憧れを集めたに違いない。その憧れは、あんな風になりたいと願う次のミス・シセイドウを育てていく。

「女性の憧れの職業といえば、スチュワーデスカミス・シセイドウでした」

戦争で一時中断した後、戦後を生きる女性たちのために復活したミス・シセイドウの第九期生だった瀧江ノリ子さんは語る。

彼女がミス・シセイドウとして活躍したのは、一九五〇年代終わりから六〇年代。その頃、ミス・シセイドウたちは雑誌に載る銀座のストリート・スナップの常連だった。銀座を歩いている美しくスタイ

リッシュな女性といえば、ミス・シセイドウだったのだ。それは彼女たちがメイクの達人で、洋服の着こなしが上手だったからなのだろうか？

多分、そうではないだろう。

ミス・シセイドウは女性が学ぶべきことを、研修で全て教わっていたと言っている。自分の健康状態が肌の美しさを左右すること。レストランや一流のホテル、クラブでの振る舞い方。自分の考えが相手に伝わるように、はっきりと、明るく、肯定的な言葉を選んで話す方法。一流の講師たちが、ミス・シセイドウに様々な教育を施した。そして、誰もがプライドを大事にするように教えられたという。自分独自の美しさを探し当て、その自分を好きになること、誇りを持つこと。それこそミス・シセイドウたちが教わったことであり、彼女たちが活動を通して女性たちに伝えたかったことでもあるに違いない。

今、必要なのは、ミス・シセイドウのような、女性の憧れを体現する存在だ。大事なことを知っていて、女性たちが目指すべき身近なスターだ。そのスターはセレブリティである必要はない。プライドを持ち、周囲に美を伝えられる女性の全てが、今を生きるミス・シセイドウなのである。

山崎ほか 文筆家。本や映画、音楽などカルチャー全体に精通し、特に女子文化のセレクト&紹介者としては他に追随を許さない存在。女性誌をはじめとして多数のコラム連載、寄稿を持つ。